

「キッズウインドサーフィン体験」の プログラム検討と評価

平野 貴也

要旨

キッズウインドサーフィン体験の実施状況を報告し、今後の実施方法およびプログラム内容を検討することに加え、小学生及び中学生対象の短期的なウインドサーフィン体験活動を評価するための基礎的な観点を得ることを目的とした。

「キッズウインドサーフィン体験」には3日間で153名の参加があった。準備運動、陸上練習、海上練習、シーマンシップの学びの4つのプログラムで構成された。参加者からは非常に高い満足度が得られた。「通常的生活の中で感じる風と異なる感覚」「風の力の理解」「スピード感や水面を滑る感覚」「体験する機会の重要性」に関する特徴的なコメントが得られ、短期的なウインドサーフィン体験を評価する観点が得られた。

The Examination and Evaluation of a "Windsurfing Experience for Kids" Program

Takaya Hirano

ABSTRACT

This research examines the teaching method and the contents of a water sports program, with the additional purpose of obtaining fundamental data for evaluating short-term windsurfing experience activities for elementary and junior-high school students. 153 students participated in the "Windsurfing Experience for Kids" program over three days. This program consisted of the four learning stages of warm-up, land practice, marine practice, and seamanship. A very high degree of satisfaction was reported by the participants. Characteristic comments were "An unusual experience of wind", "Understanding the power of wind", "The feeling of gliding over the water surface and of speed", and "The importance of the opportunity for direct experience". We gained new perspective from evaluating this short-term windsurfing experience.

I はじめに

ウインドサーフィンは波と風を利用し、全身を使って行うスポーツであり、国体やオリンピック種目にも採用されている。海での活動はマリンスポーツへの興味や関心を高めることはもとより、水への親しみ、海浜の利用、自然環境、シーマンシップについての学びを深めることができる。ヨーロッパや米国ではウインドサーフィンをういたセーリングキャンプが盛んに開催され、次世代の育成を考えた取り組みが行われている。我が国でもウインドサーフィン専門店を中心にキッズやジュニア対象の各地で開催されている^{1) 2)}。キッズやジュニア世代を対象とする場合、軽量でコンパクトなキッズ専用の用具が必要である。しかし沖縄県北部地域にはウインドサーフィン専門店やマリナー、海洋クラブ等が存在しない。また活動の場と用具を提供できないのが実情である。

平成8年、第15期中央審議会では「生きる力」を育むことの重要性が示され、青少年の自然体験や社会体験などを充実させる施策が出された。児童や生徒が自然体験をすることによって社会的スキルや対人関係、自然への理解、自己概念が向上することはすでに明らかにされている。また平成14年度から施行された小学校・中学校及び高等学校の学習指導要領に明示されたことを受けて³⁾、「水辺活動」への取り組みやそれに伴う研究活動が行われてきた。その過程で実施方法や効果について検討がなされてきた。今後も水辺の環境を利用したスポーツの「直接体験 (first hand experience)」や「活動しつつ学ぶ (learning by doing)」ことを通じて人間関係の構築や生きる力の育成に大いに期待がもたれている。

千足は水辺活動がどの程度学校教育に導入されているのかという実態及び実施にあたっての阻害要因を明らかにし、「安全管理上の問題」、「時間的な問題」、「指導者がいない、または不足している」について高い回答率が示されたと述べており、安全に指導できる環境の整備を呼びかけている⁴⁾。

一方、日本マリンスポーツ普及教育振興財団は、水辺活動施設のある市町村を抜粋し、その地域の小中学校、高等学校及び水辺活動施設に学校教育における水辺活動における実態調査を行い、「水辺活動として実施しやすい種目はカヌーである」こと、「生徒・指導者の感想から、水辺活動には好印象であることがうかがわれる」こと、「安全面の確保の難しさ、総合的な学習・体育の時間での実施は難しい」との回答が得られたと報告している⁵⁾。また谷らは少年少女期の海洋スポーツ活動の事例の中で大規模な海洋スポーツ施設や指導者を多数そろえている施設は数少なく、海洋スポーツ活動やマリンスポーツを一般化させるためにも地域市町村、企業が海洋スポーツを提供し、体験させる取り組みをプログラム内容等の検討をしていく必要があると述べており⁶⁾、地域との連携、企業の協力がマリンスポーツの普及のために欠くことのできないかせない要素であり、提供するプログラムについても今後検討する余地があり、いろいろなケースを積み上げて検討すべきであると言える。

沖縄県は温暖で、年間を通じて安定した風が吹き、リーフに囲まれた遠浅な海岸が多く、ウインドサーフィン競技のトレーニングを行うには最適な環境である。最適な自然環境を生かし、ハードを準備し、体験する機会を与え、活動の場所作りを行えば沖縄県北部におけるマリリゾートの活性化、地域貢献、地域を代表するスポーツの育成へとつながるものと考えている。こうした主旨に賛同頂き、海洋博覧会記念公園管理財団の主催する「美ら海体験まつり」の一

環として「キッズウインドサーフィン体験」を実施することができた。

ここではプログラムの実施状況を報告し、次年度以降の実施方法およびプログラム内容を検討すること、さらにキッズ・ジュニア対象の短期的なウインドサーフィン体験活動のプログラムを評価するための基礎的な観点を得ることを目的とする。

II. 研究の方法

本研究の方法は「キッズウインドサーフィン体験」の実施方法および実施形態を報告し、プログラム終了時に参加者に対して実施したアンケート調査からプログラム評価を行う。これまでも小学生、中学生を対象としたキャンプ体験や海洋スポーツプログラム体験を評価する尺度は、数例作成されている。ただ今回のケースはウインドサーフィンに限定している点、プログラムが特殊である点から既存の尺度は合致しないと考え、自由記述の形式で調査を行った。このことによりキッズ・ジュニアを対象としたウインドサーフィン体験の新たなプログラム評価の指標や観点が得られるものと考えた。なお低学年者には質問に対する補足説明を保護者に依頼した。調査項目は (1) 風についてかんじたこと、(2) ウインドサーフィンについて感じたこと (3) 体験を通じて学んだこと、(4) 体験を通じて最もおもしろかったこと、(5) 体験全体の評価、(6) 体験全体の評価の理由の6項目であった。

III. 結果及び考察

1. プログラムの概要

- 1) プログラム名：「美ら海体験まつりキッズ ウインドサーフィン体験」
- 2) 主催：海洋博覧会記念公園管理財団
- 3) 協力：名桜大学人間健康学部平野研究室
- 4) 期日：平成20年7月27日、8月9日・10日
(3日間)
- 5) 場所：海洋博覧会記念公園内エメラルドビーチ
「憩いの浜」海水浴場エリア内
- 6) 対象者：小学生及び中学生

2. 参加・活動内容

1) 参加者の状況

7月27日44名、8月9日46名、8月10日53名の計153名の参加があった。参加者のうち、完全記入の回答が得られた128名を分析対象とした。参加者の属性を表1に示した。

9歳から11歳の小学生高学年が53.1%と約半数を占めた。沖縄県北部からの参加者が39.1%と最も多く見られ、その他の地域から60.9%の参加が

項目	度数(n)	割合(%)
n=128		
性別		
男子	72	56.2
女子	56	43.8
居住地域		
沖縄県北部	50	39.1
沖縄県中部	33	25.7
沖縄県南部	21	16.4
県外	24	18.8
年代		
6歳から8歳	35	27.3
9歳から11歳	68	53.1
12歳から15歳	25	19.5
最小値		6
最大値		15
平均値		9.84
標準偏差		2.131

あった。北部地域には各所にチラシを掲示または配置し、名護市報にも掲載した。ただ県外を含むその他の地域には特別な広報活動を行っていない。おそらく「美らうみ水族館」のホームページや新聞広告に掲載していただいたのが効果的であったと思われる。

2) プログラムの流れ

プログラム開始2時間前より受付を開始したが、受付開始より約30分で定員に達した。初日は受付を2カ所設置したが、転記ミスや連絡ミスによる混乱の原因となったため2日目より1カ所とした。事前申込や記入方法などにさらなる改善が必要である。

まず5名のグループを1グループとし、海上での活動が重ならないように考慮して時間差をつけ、1日に9から10グループにプログラムを実施した。表2に1グループに対するプログラム実施内容を示した。1グループの所要時間は約50分であった。図1は陸上練習の風景である。陸上練習時は1名の参加者に1艇のセールボードを用い、各艇に1名の指導者がついてセールアップ、プレセーリング動作、セーリング動作、進路変更、方向転換などの動作を主に指導した。

図2・図3は海上での練習風景である。エメラルドビーチ海水浴場「憩いの浜」は海底が平坦で岩等の障害物がなく、満潮時でも水深1m前後の箇所が約縦20m横40m確保できる。またクラゲ防止ネット内のためハブクラゲ等の危険生物に接触する機会を制限できることから場所を選定した。海水浴場エリア内をセーリング専用とし、実施した。ただ満潮時以外は潮位が浅くなって帆走が不可能となるため実施時間を満潮時前後約3時間に限定した。海上練習では参加者1名に1艇を用い、1艇につき2名の指導者を配置し、指導及び安全監視を行った。用具にはNAUTIX社製2.0m 2セールとSTARBOARD社製START「M」サイズを用いた。特に小さいセールを用いたのは、セールを操作する楽しさを得るためである。また指導者

表2 プログラム内容

プログラム	時間配分
準備運動	5分
陸上練習	10分
海上練習	25分
シーマンシップの学び	5分
アンケート記入	5分
計	50分



図1 陸上練習



図2 海上練習①



図3 海上練習②

が参加者と一緒にボードに乗って帆走しながら指導できるように浮力の多いボードを選択し、使用した。なおプログラム専属のライフガードを1名配置して頂き、全体の安全監視にあたった。特に怪我や事故等の報告は得られなかった。図4はシーマンシップの学びの講義風景ある。シーマンシップの学びとはセーリング技術だけでなく海に親しむ上で大切にしたいことを各日テーマとして取り上げ、参加者にわかりやすく説明するもので、講義形式で実施した。各日のテーマは①協力（仲間を大切にしましょう）②安全（うみをおそれず、あなどらず、したしむ）③環境（海をきれいに）であった。わずか25分の海上練習をもとに子供たちにも理解しやすい具体的なストーリーを組み立てることが難しく、今回のプログラムで特に工夫を要した。



図4 シーマンシップの学び

3) プログラム評価

(1) 風について (表3参照)

「風が重い」「強い」「軽い風」「弱い」等、風の強弱に関する回答が全体の63.3%を占めた。1日目は台風の影響で3から5メートルの風が吹き、強いと回答する者が多く見られた。反対に2日目は風が弱く、体の大きな生徒が乗ると進むのがやつの状況の時間帯があり、弱いと回答する者が多く見られた。セールスの重さはセール面積や自然条件に左右されるので致し方ないと思われる。なお15.6%の者が風の微妙な変化や陸上との違いを挙げており、通常の生活で感じる風の感じ方とは異なる風を感覚を意識したようであり、プログラムの特徴であると言える。「その他」には操作や体験の感想など風に関すること以外が述べられていた。

項目	度数 (n)	割合 (%)
重い、強い	54	42.2
弱い、軽い	27	21.1
変化する、陸と異なる	20	15.6
爽快、気持ちいい	18	14.1
その他	9	7.0
計	128	100.0

(2) ウインドサーフィンについて感じたこと (表4参照)

「おもしろい、楽しい」が42%を占めた。ついで「難しい」と感じた者が29%見られた。「難しい」と回答した者の多くは、風向や風向に対するセールの展開などについての難しさを述べており、指導方法改善の必要性を感じた。陸上練習時に風のつかみ方やボードの向きを変えてセールを引き込むなどを内容にさらに加えるべきであろう。19.5%の者が回答している「風の力で進むことに驚いた」や「風の力を感じた」など風の力への理解はセーリングスポーツ独特の感覚であると言える。体験時間は少なくともセーリングスポー

項目	度数 (n)	割合 (%)
おもしろい、楽しい	54	42.2
難しい	29	22.7
風で進む 風の力	25	19.5
重い、疲れる	9	7.0
バランス	8	6.2
簡単	3	2.4
計	128	100.0

ツとしてのウインドサーフィンの特徴が伝わったものと思われる。

(3) 体験を通じて学んだこと (表5参照)

ウインドサーフィンの操作法や乗り方にくわえ、25.8%の者が環境やシーマンシップに関することを挙げており、アンケート回答の直前に行っていることを考慮したとしても、シーマンシップの学びが印象的であったことがわかる。体験を通じて知識の理解を促すことは効果的であり、今後もウインドサーフィンを楽しむだけでなく海を利用する上での知識やマナーについて伝えていくべきであると感じた。

項目	度数 (n)	割合 (%)
操作法	36	28.1
乗り方	35	27.3
環境・シーマンシップ	33	25.8
風で進むこと	16	12.5
バランス感覚	6	4.7
その他	2	1.6
合計	128	100.0

(4) 体験を通じて最もおもしろかったこと (表6参照)

帆走したことやスピード感が46.9%と最も多く、次いで初めて体験できた喜びや初めて体験した感覚について18.8%述べられていた。「スーッと滑った」「すごく速い」などの記述が見られ、スピードや水面を滑る感覚はウインドサーフィンの大きな魅力であることがわかる。さらなる普及を考える上で重要な要素である。また「初めて風を感じた」「グッと風をこらえて進んだ」などプログラム特有の表現が得られた。なお「海に落ちること」「陸上練習」など意外な回答も見られた。

項目	度数 (n)	割合 (%)
走った、スピード感	60	46.9
はじめの体験・感覚	24	18.8
操作できた	21	16.4
海に入る、落ちること	10	7.8
風を感じる	6	4.7
ふれあい、指導者の対応	5	3.8
体操、陸上練習	2	1.6
合計	128	100.0

(5) 体験全体の評価 (表7参照)

この項目は唯一、選択肢による回答してもらった項目で海洋博記念公園管理財団が他のプログラムにおいても共通して調査している内容である。「良かった」「どちらかと言えば良かった」「どちらかと言えば悪かった」「悪かった」の4つの選択肢から構成されている。97.6%が「良かった」と答えており、プログラムに対して非常に高い満足度が得られたことがわかる。「どちらかと言えば悪かった」と回答した者は「(6)評価の理由」に自らが他の者と比べて上達できなかったことを挙げており、指導上の失敗や対応の悪さにともなう評価ではなかった。

項目	度数 (n)	割合 (%)
良かった	125	97.6
どちらかと言えば良かった	2	1.6
どちらかと言えば悪かった	1	0.8
悪かった	0	0.0
合計	128	100.0

(6) 評価の理由 (表8参照)

(5)体験全体の評価の理由として、「ウインドサーフィンに乗る機会が得られたこと」「なかなか体

項目	度数 (n)	割合 (%)
機会が得られた、初めて触れた	27	21.1
おもしろい、楽しい	26	20.3
うまくできた、落ちなかった	15	11.7
進めた、スピード	13	10.2
教え方	11	8.6
またやりたい	9	7.0
環境、勉強	6	4.7
難しい、できなかった	4	3.1
特になし	17	13.3
合計	128	100.0

「体験できないこと」「初めて体験できたこと」などを挙げる者が最も多く、ついで「楽しかった」「おもしろかった」であった。「楽しかった」「おもしろかった」などの回答は容易に思いつき、簡単に記入することができる。しかし、それよりも体験できたことや機会が得られたことを「良かった」とする記述が多く見られ、初めての体験した感動や体験する機会が得られた喜びがわかる。つまり参加者はウインドサーフィンが通常、体験する機会の少ないスポーツであることを認識しており、だからこそ体験できたことや乗れたことを評価の理由として挙げたのである。このことから通常体験しにくいスポーツを体験する機会や環境を提供することの重要性を改めて再認識できる。こうした直接体験の機会を継続的に設けることで海や風の楽しさを認識し、子供たちの自然環境への理解やマリンスポーツへの親しみが促進できればと考えている。

IV. まとめと今後の課題

1. まとめ

「キッズウインドサーフィン体験」には3日間で153名の参加者があった。準備運動、陸上練習、海上練習、シーマンシップの学びの4つのプログラムで構成された。参加者からは非常に高い満足度が得られた。「通常の生活の中で感じる風と異なる感覚」「風の力の理解」「スピード感や水面を滑る感覚」「体験する機会の重要性」に関して特徴的なコメントが見られ、短期的なウインドサーフィン体験を評価する観点が得られた。今後も継続してプログラムを実施することでプログラム内容をさらに工夫し、調査内容を精選する必要があることがわかった。

2. 今後の課題

プログラム内容の改善として受付方法の工夫および風向やセール展開に関する指導方法の改善が挙げられた。アンケート調査には自由記述による方法を用いたが、小学生・中学生を対象とする場合、「軽い」「楽しい」など短い一語のみが記入されるケースが多く、プログラム効果を測定する指標として活用するためには記入方法の工夫が必要である。ただ今回の調査によって基礎的な観点を把握することができた。調査結果を踏まえ、プログラム効果を測定する尺度を構成し、量的な調査を実施すべきである。そのためには今後も継続していくつかの事業や活動で実証的な調査を重ねる必要性があり、今後の課題とする。

謝辞

有意義で貴重なウインドサーフィン体験を開催していただきました海洋博覧会記念公園管理財団、特に公園管理センターの方々には猛暑の中、多大なご協力をいただきました。厚くお礼申し上げます。

参考文献

- 1) ハイ・ウインド編集部、『隔月刊ハイ・ウインドNO.290』（株）マリン企画、pp.86-87、2006。
- 2) Windsurfer編集部、『WindsurferNO.52』（株）エイ出版社、pp.8-9、2008。
- 3) 学習指導要領： http://www.mext.go.jp/b_menu/shuppan/sonota/、November 17、2008。

- 4) 千足耕 - 「学校教育における水辺活動への取り組みに関する調査研究」『国立オリンピック記念青少年総合センター研究紀要第5号』、2005、pp.13-23.
- 5) 日本マリンスポーツ普及教育振興財団、「水辺活動の教育への導入に関する調査報告書（児童・生徒を対象とした水辺活動の体験機会の継続的展開をめざして）」、『日本マリンスポーツ普及教育振興財団』、2003、pp.7-29.
- 6) 谷健二、柳敏晴、濱田幸二、平野貴也「少年少女期における海洋スポーツ活動に関する研究—体験学習「わんぱくチャレンジャー」を事例として」『鹿屋体育大学学術研究紀要第16号』、2003、pp.121-127.